

# 博 多 V

福岡市埋蔵文化財調査報告書第120集

1985

福岡市教育委員会

# 博 多 V

福岡市埋蔵文化財調査報告書第120集

1985

福岡市教育委員会

卷頭図版 1



S K01土壤出土鉄器大盤

卷頭図版2



SKO I土壤出土鉢釉大盤

## 序 文

旧博多郡は古代～中世における大陸文化流入の門戸として栄えたところとして知られ、今回の調査でも夥しい輸入陶磁器類が出土し、尚一層この感を強くするものです。

この報告書が埋蔵文化財の理解と認識を深める一助となり、研究資料としても活用していただければ幸いです。また最後に発掘調査から資料整理に至るまで御協力をいただいた多くの方々に対し深甚の敬意を表すものであります。

昭和60年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

## 例　　言

- 本報告書は1984年5月23日～6月15日に発掘調査を実施した株式会社「中村屋」社屋建替えに伴う博多遺跡群第25次発掘調査報告書である。
- 遺構は記号化し、井戸址→S E、土壤→S K、溝→S Dと呼んだ。
- 遺構の実測および遺物の実測は下村哲・横山邦輔が分担して行ない、遺物の一部実測を文化課力武卓治・常松幹雄氏におねがいした。
- 本書の編集・執筆は下村・横山が協同してこれを行なった。

## 本文目次

序文	頁
I はじめに.....	1
1 調査に至る経過.....	1
2 調査の組織.....	1
II 遺跡の立地と環境.....	3
III 調査の記録.....	5
調査地点の概要.....	5
1 古墳時代.....	6
2 歴史時代.....	8
(1) 井戸址.....	8
(2) 土壙.....	11
(3) 溝.....	20
(4) 柱穴群および攬乱坑.....	21
IV まとめ.....	23

## 図版目次

- P L . 1 . 第25次調査区全景（東側より）
- P L . 2 . 1 . 第25次調査区全景（東側より）
  - 2 . 第25次調査区中央部遺構出土状況（北側より）
- P L . 3 . 1 . S E01井戸址・S K01土壤出土状況（南側より）
  - 2 . S E02井戸址出土状況（北側より）
  - 3 . S E03井戸址出土状況（東側より）
  - 4 . S E井戸 構築状況
- P L . 4 . 1 . S K01土壤出土状況（北側より）
  - 2 . 同土壤内鉄軸盤出土状況
- P L . 5 . 1 . S K05土壤出土状況（南側より）
  - 2 . 同土壤内土師皿出土状況
- P L . 6 . 1 . S K03土壤出土状況（南側より）
  - 2 . S D . S D01溝出土状況（南側より）

## 挿図目次

	頁
Fig. 1 第25次調査地点図 (1/400)	2
Fig. 2 第25次調査区全体図	4
Fig. 3 古墳時代遺物実測図 (%)	7
Fig. 4 S E01井戸址実測図 (%)	8
Fig. 5 S E01井戸址出土遺物実測図 (%)	9
Fig. 6 S E03・05井戸址実測図 (%)、折込み	—
Fig. 7 S K01土壤実測図 (%)	10
Fig. 8 S K01土壤出土遺物実測図 (%)	11
Fig. 9 S K02土壤実測図 (%)	12
Fig. 10 S K02土壤出土遺物実測図 (%)	13
Fig. 11 S K03土壤出土遺物実測図 (%)	14
Fig. 12 S K04土壤実測図 (%)	14
Fig. 13 S K05土壤実測図 (%)	15
Fig. 14 S K05土壤出土遺物実測図 (%)	16
Fig. 15 S K06土壤実測図 (%)	17
Fig. 16 S K07土壤実測図 (%)	18
Fig. 17 S K06・07土壤出土遺物実測図 (%)	19
Fig. 18 S D01溝実測図	20
Fig. 19 S D01溝出土遺物実測図 (%)	21
Fig. 20 柱穴群および擾乱坑出土遺物実測図 (%)	22
Fig. 21 S E04井戸址実測図	23

# I は じ め に

## 1 調査に至る経過

1984（昭和59）年1月株式会社中村屋より、博多区祇園町1番1号地内における社屋の老朽化に伴う建替え計画が文化課に提出され、建築に先立って同地内の埋蔵文化財の有無確認が必要となった。文化課では株式会社『中村屋』と協議の結果既存建物および付帯施設一齊が取り壊された同年4月11日試掘調査を行ない、弥生時代後期～中世期に亘る生活遺構を検出した。この後建設によって失なわれる遺構群の処置についての協議を重ねた結果本調査を実施する事で両者間に調査契約相整い、1984（昭和59）年5月23日より調査を開始した。

調査に先立っては遺構上面の擾乱土の搬出を株式会社『中村屋』にお願いした。

調査対象面積：339.8m<sup>2</sup>

調査期間：1984（昭和59）年5月23～同6月15日

## 2 調査の組織

調査委託：株式会社『中村屋』（福岡市博多区祇園町1番1号所在）

調査主体：福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第2係

事務担当：折尾学（係長）、古藤国生

調査担当：下村智、横山邦継

調査および整理作業に従事した方々

井上ヒデ子、鬼尾喜代子、亀川スミ子、亀川照義、川田初、川田久子、岸田浩、竹林義之、橋哲也、筒井ひとみ、土妻崎靖、富田マチ子、長野照子、西山秀子、原口マサ子、花畠照子、平田美絵子、別府加代子、溝口武司、溝口博子、柳井順子、矢野隆子、吉田世喜子、脇坂マキノ

なお発掘調査にあたっては施主である株式会社『中村屋』監査役永島征男氏に格別の御協力を戴いたほか、現場作業においては株式会社竹中工務店九州支店営業部関豊氏および同九州支店作業所長江藤住義氏、貞包優氏に諸々の御配慮を得た。記して感謝致します。



Fig. 1 第25次調査地点図 (1/4000)

## II 遺跡の立地と環境

**立地** 博多遺跡群は福岡平野を南北に貫く那珂川の右岸河口近くに形成された標高5.5m前後の古砂丘上に位置し、東を江戸時代に開削されたといわれる石堂川（御笠川）に、更に南は石堂川開削以前は那珂川に合流し現在の博多駅付近を西流していた旧比恵川の河道および氾濫原によって囲まれる。

**歴史的環境** 1977年（昭和52年）2月地下鉄祇園町工区の調査を皮切りに現在に至るまで数多くの調査がおこなわれた。時期的には弥生時代中期前葉（汲田式）甕棺墓および同期の土器類が出土し、すでにこの時点に古砂丘の形成はなっている。弥生中期中葉～後期にかけて隆盛を誇った「奴国」の片鱗に触れる材料は現在までのところ全くないのであるが続く古墳時代前～中期では竪穴住居址・方形周溝墓などが多く調査され、同期の集落は遺跡群全域に拡がったと考えられる。以後奈良～中世期に至る博多の歴史的発展の方向を決定的にした大きな事件があった。それは宣化元（536年）の那の津の官家のこの地への設置（日本書紀一諸國の屯倉の穀を筑紫那津に運ぶ）である。これによって博多を中心とする博多湾沿岸は対外交渉の窓口として大きく開かれていくのである。更に持統天皇2（688年）には後の太宰府鴻臚館の前身である筑紫館が外国使節接待のための迎賓館としておかれている。また承和9（842年）には太宰府の山先機関である鴻臚館（現在の平和台球場付近にあった）の名がみえる。鴻臚館は寛平6（894年）年菅原道真的提唱による遣唐使の廃止によってその役割を対商客応接機関として大きく変化させていったが、一方政治体制としての律令制の緩みは各地に莊園の発生を促していた。ここ博多は太宰府天満宮の神官寺安樂寺の莊園であったが莊園管理者は多数の宋船を博多に入港させ、また多数の宋商も住みつき貿易をきわめることとなつた。11世紀後半代のことである。保元3（1158年）太宰大氏となつた平清盛が貿易港としての「袖ノ港」を築港したことによって博多は更に隆盛を迎えることとなつた。これ以降二度の蒙古襲来も含んでこの地の経済的独占権をめぐっては多くの争奪戦がおこなわれ、この度毎に博多は兵火に焼かれ、灰燼に帰したのである。

---

### 主要参考文献

1. 貝原益軒「筑前国續風土記」
2. 中山平次郎「古代の博多」昭和59（1984年）九州大学出版会
3. 福岡市高速鉄道埋蔵文化財調査報告Ⅳ 博多－高速鉄道関係調査(1)－  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集 1984年

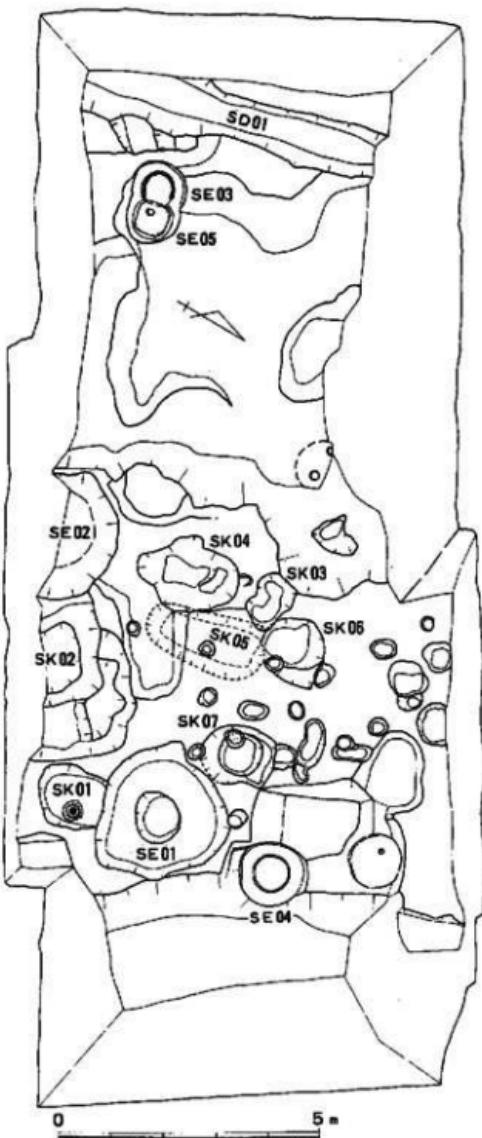


Fig. 2 第25次調査区全体図

### III 調査の記録

#### 調査地点の概要

博多遺跡群第25次調査地点は標高5.1m前後を測り、遺跡群の中では南側に地点にあたる。調査は既存建物や付帯する構造物のために擾乱された上部層を除去する作業から始めたが、東西に長い調査区の東端部で地表より約2m、中央部で約1m、西半部で約3mの擾乱部分が認められた。擾乱層（上部層）内では古墳時代前期～中期の土師器類、同後期の須恵器、11～12世紀を主とする土師皿、輸入陶磁器から近・現代陶磁器類に至るまで多種多様な遺物類が出土した。これらの遺物類は本米各々の遺構あるいは遺構面に属していたものが遊離したのであるが、実際に生活面として確認できるのは調査区中央部に殆ど限られるといって良く、東・西両側は擾乱のため残存は殆どみとめられない。

遺構検出面は比較的遺構面の残い中央部で黄褐色砂土が地山であり、下部に従って黄～黃白色砂土へと変化している。検出遺構は井戸址5基（SE01～05）、土壙7基（SK01～07）、溝1条、柱穴群である。井戸址5基のうち2基（SE01・02）は井戸枠に径80cm程の桶を使用するもので、全体の掘方でも径2.5mをこえる。掘方および井筒内からは輸入陶磁器（青磁器・褐釉陶器）、土師皿（糸切り底）、布目瓦、古墳時代土師器瓶破片などが出土した。また他の3基（SE03～05）は近世以降の所産である。土壤は何れも埋土が暗茶褐色を呈し、調査区中央部で検出された。このうち東南隅に検出したSK01土壙では鉄軋人盤2個体、褐釉長胴壺などの特徴的遺物を出土した。またSK05土壙は隅丸長方形でやや北側短辺部がひらく形態をなし、土師皿6枚（糸切り底）を重ね埋置する点で墳墓である。溝はかろうじて擾乱をまぬがれた西端部で1条が検出できた。上部がかなりの削平を受けている南北溝である。前記井戸址とはほぼ同様の遺物を出土した。柱穴群は18個が検出できたがまとまりをもつものはなかったが青磁器、土師皿類が少量づつ出土した。

以下各個別遺構とその出土遺物について詳述することとする。

#### 調査日誌抄

- 1984年5月23日（晴） 摰乱上撤出後に遺構面の検出開始。  
1984年5月30日（晴） 調査区東南部SK01土壙より鉄軋人盤など出土。  
1984年6月2日（晴のち曇） 本日では全体遺構の分布が明らかとなった。  
1984年6月8日（晴） 現確認面での遺構実測・レベリング終了。  
1984年6月12日（曇時々晴） 上壙（SK05）実測、遺構埋め戻し。  
1984年6月15日（晴時々曇） 出土遺物洗浄および現場撤収。

## 1 古墳時代

第25次調査では古墳時代に属する生活遺構・墓地に関連する遺構は検出できなかったが中世期上壙・柱穴あるいは後生の擾乱坑埋上中より少量の土師器類が出土した。第25次調査区周辺部では5世紀前葉を中心とする生活遺構がみられ、また同期の土師器類が出土しておりここも集落址の一部であった可能性が高い。

出土遺物（Fig. 3）遺物のうち1は土師器甕胴部破片である。外面細かい縦刷毛目調整、内面横位の削りを施す。2・3は須恵器甕胴部破片で外面は何れも平行叩き、内面は青海波文を残す。4は甕口縁部で、端部は直線的に仕あげ、これに統いて断面が鈍い三角形をなす一条突帯を付す。5は土師器甕である。窪い口縁部が緩く立あがり、外反する。内外面ともに赤褐色を呈し、外面横ナデ・内面口縁部ナデで、頸部以下はヘラ削りとなる。焼成堅緻。S D01溝出土。6も土師器甕である。内弯気味に外反する口縁部は上端部で平端となり、内側に突出する。頸部はよくしまる。胴部はほぼ中位を最大径とし、底部はやや尖り気味となる。外面は全て煤が厚く付着し、内面は器色暗黄褐色を呈する。器面調整は口縁部内・外面ともに横ナデ、胴部外面は中位が斜め刷毛目、これ以上・以下が縦刷毛目調整である。内面は頸部ヘラナデ、体部斜めヘラ削りで底部は指頭痕がみられる。口径15.2cm、器高21cm、胴最大径19.2cmをはかる。胎土密。焼成堅緻。遺構検出面出土。7は土師器甕である。内外面とも赤褐色を呈する。器面調整はヘラ磨き。胎土は非常に密。焼成堅緻。包含層出土。8は土師器器台である。坏部は暗赤褐～淡黄褐色を呈し、外面横ヘラ磨き調整。遺構検出面出土。9・10は二重口縁をなす土師器甕である。口縁部は緩く外反するが下端部は突出し、強い棱をなす。外面淡黄褐色を呈し、口縁内外横ナデで体部内面ヘラ削りを施す。胎土は細砂を混入し、密。焼成は堅緻である。包含層出土。11は土師器高环脚である。器面は磨滅が著しい。

出土した土師器・須恵器類は少量であるが、このうち須恵器(2～4)、土師器(7)などは小破片で特徴をとらえ難く、おそらく6C代以降の所産と考えられる。

また土師器1は8とはほぼ同一の器面調整で器形的には球状胴部にやや尖り気味の底部をもち、内弯気味に外反する口線を有する布留式系統の甕となると考えられ、甕(5)、器台(6)とセットをなすものである。また高坏(11)の特徴も同様であり、9・10の二重口縁甕は山陰地方系統甕の特徴をもち、これらの構成から時期的には5C前葉代のものと考えられる。

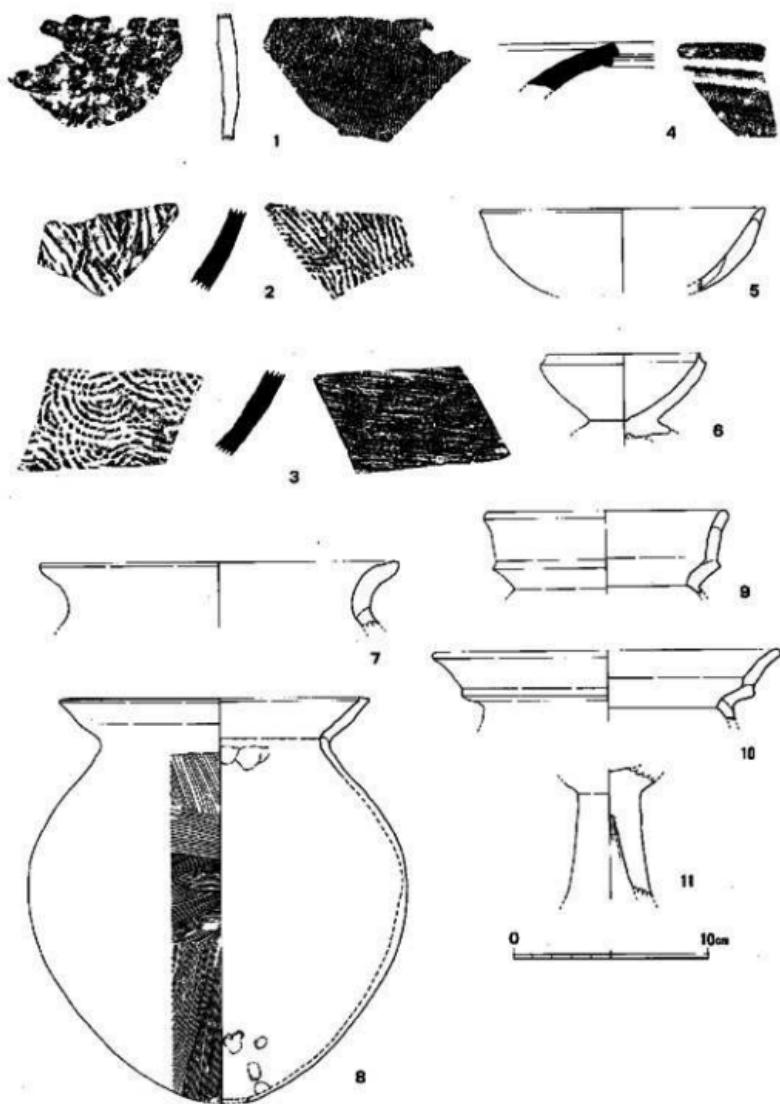


Fig. 3 古墳時代遺物実測図 (1/3)

## 2 歴史時代

第25次調査で確認された歴史時代（平安時代末～鎌倉時代・近現代）の遺構は前記の様に井戸址5基、土壙7基、溝1条、柱穴と考えられる小竪穴18個などである。各遺構のうち井戸址3基（SE03～05）以外はほぼ共通する出土遺物構成をもっているが、全体として遺物は細片が多く種類を区別のみである。従って図示できるものは全体のうちの僅かな点数であり、種類について数量をあげるにとどめざるを得なかった。以下個別に説明を加える。

### (1) 井戸址 (Fig. 4～6. (21. Pl. 3)

SE01井戸址 (Fig. 1) 調査区東端部に検出された。掘方にはほぼ円形で、径2.5mをわかる。井筒部分は掘方底面より更に1m程掘込み、径約80cm程度の桶を使用し、現高1.9mを残す。遺物は掘方埋土と井筒埋土中より出土した。掘方内では青磁器（碗55、壺1、皿1）、白磁器（碗9、皿1、壺1）、施釉陶器58、土師皿13、火舍1、布目瓦32、北宋錢1〔天聖元宝（初鑄1023年）〕点他であ

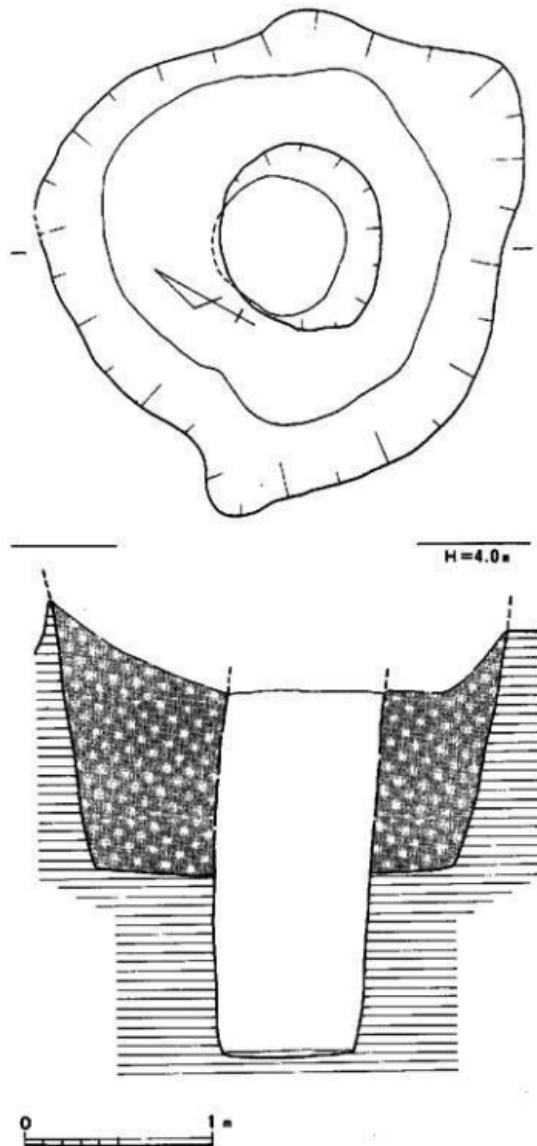


Fig. 4 SE01井戸址実測図 (1/30)

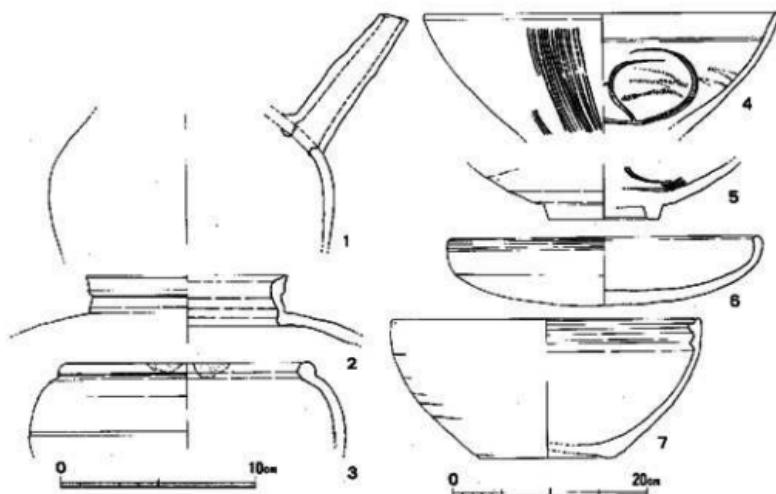


Fig. 5 SE01井戸址出土遺物実測図 (1/3 - 1/6)

る。井筒内は青磁器（碗15、皿1、壺1）、施釉陶器16、褐釉陶器（水注、壺各1）、土師皿19（糸切り底）、布目瓦5点などである。

**出土遺物 (Fig. 5)** 出土遺物のうち1は黒褐釉水注である。注口部付近の小破片である。体部は球状に膨らみ、注口部は直線的に上方に伸びる。体部内面は横ナデ調整である。2は器色は淡い茶褐色を呈する陶器である。口縁は体部に比べて小口となり、直立気味で上端部を外方に引出している。器内外面は何れも横ナデである。器形の特徴から無釉四耳壺である可能性が高い。口径10.4cm。3は褐釉壺である。口縁は内傾して、断面は円形に近く、外面直下に沈線を施す。また体部中位にも沈線1条を施す。口径13.2cm。4は青磁碗である。内外面ともに貫入がある。体部外面は飾描文を内面は刻花文および構制突による雷光文、一条沈線を施す。口径18.2cm。5も青磁碗である。底部内面は輪状に露胎となり、体部に飾描文を施す。6は口縁が内弯気味に立あがる土師杯である。器色は茶褐色を呈し、全体磨き状のナデ調整。口径15.4cm。7は陶製捏鉢である。内外面ともに暗赤褐色を呈し、外面は接合痕が残る。内面は口縁直下およびその下に隆起帯をつくり出している。口径31.8cm、器高15.1cm、底径14cm。

**SE02井戸址 調査区中央部南端壁面近くで半分を検出したが崩壊のため掘下げを断念した。**掘方径2.5mで中央部に径70~80cm程の桶製井筒を有した。掘方内より鍋蓋弁文・猫搔き手青磁碗、白磁碗、土師皿18、施釉陶器17、布目平瓦5、古墳時代須恵器甕4、蓋1点などが出土した。構造的にはSE01と同様である。

S E03・05井戸址 (Fig. 6) 向井戸址は調査区西端部に隣接して営まれ S E03か05によって切られている。S E03は径1m程の円形掘方を有し、井筒径は最底面で55cm程度の規模である。構造は両側を欠失するが板材を三段に積むもので最下段の板材が最も短く、上部に従って長さを増す。最下段の板材は幅14~15cm、長さ59~60cm、厚さ1.5cm程で下端部内側を長さ9cm程斜めに削っている。中段板材は幅15~16cmとやや広く、長さ65cm程度、厚さ1.5cmをはかる。最上段板材は幅10cm、長さ75cm程度、厚さ1.5cmのものである。板材は最下段より積まれたものらしく、上部に従って外側に組んでおり、下段~上段~20・14・18枚程度のものが使用されたらしい。材はよく目の通った針葉樹(杉?)が使われている。掘方内より施釉陶器1、瓦質土器皿1、不明土器2点などが出たした。本来は掘方からすれば2.5m以上の深さをもった井戸であることは確実である。S E05は径1m程の円形掘方を有し、井筒の最下面是径1mをはかる。構造は大きく2段につまれた板材と板瓦であってこの上に調整を加えた扁平な板石に径10cm程の穿孔したものを蓋石として乗せている。下段は幅7~10cm、長さ75cm内外、厚さ2.5cm程の板材を使用している。板材の下端部内面は長さ15~17cmに亘って斜めにそがれている。材は全周で20枚内外であり、松材使用の可能性がある。上段の板瓦は板材上端部から約8cm程下った位置の外側から上方に3段を積んでいる。板瓦は全て規格性のある製品であり、長さ25cm、幅17cm、厚さ2.5cmを測ることができる。瓦積みは最下段の瓦の合目と目筋が通らない様に全体を1~2cm程ずらし、更にその上段のものもこれを踏譲して積んでいる。また蓋として使われた石材は砂岩で面取りがある。やや片寄ってなされた穿孔はポンプなどのパイプを挿入するためのものであろうか。掘方内には遺物は全く出土しなかった。

S E04井戸址 (Fig. 21) 調査区東端部に近く位置し、地下牢構築による大擾乱によって上部を削平されてしまっているものの比較的旧状を伝える瓦井戸である。掘方は径1.3m程の円形を呈し、井筒の積み方は下段が板材1段、上段が板瓦の9段である。下段板材は長さ50cm、幅10cm、厚さ1.8~2cm程の針葉樹を使用しており、下端部外面を長さ5cmに亘って斜めに削りおとされている。材は同規格のものを19枚使用している。上段板瓦は長さ25cm、幅19cm、厚さ2.5cmを測る規格性のある製品を使用している。瓦積一段目は下段の板材上端部外側に9cm程沿わせる形で積んでいる。更に2段目は壁面縦の筋目の上端に瓦小口部(短辺部)の中央が来る様に積んでおり、これ以上はこの積み方が連続的におこなわれ、結果として壁面の縦筋目が交互に進む形状となっている。瓦積み部分は外形で直径70~72cm程を測り、一段部分に使用された瓦は11枚となり、9段合計では99枚を数えることが出来る。井戸底面は海拔0.5m程にあたるが周辺の東・西側の大擾乱坑を掘りあげたためか湧水は通常でも10~20cm程度しかみられない。

この様な瓦使用の井戸は博多遺跡群内ではかなり頗るに作られたものと考えられ、素材の規格性と造井技術は非常に確立した手法を感じさせるものである。時期的には近世以前に遡らないものと考えられる。

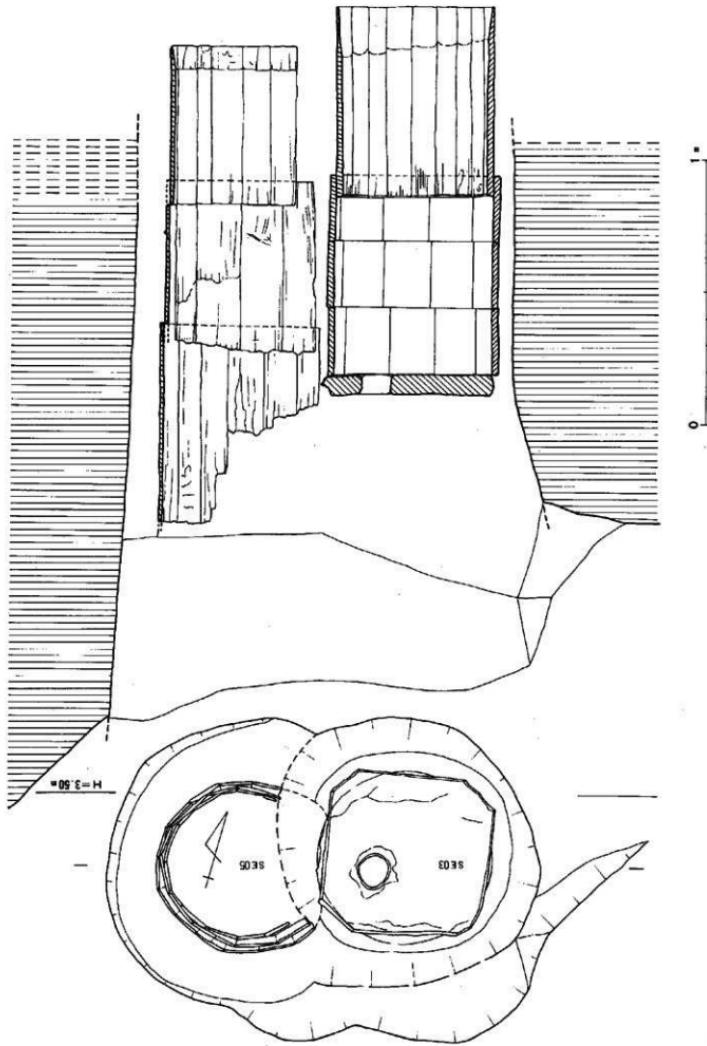


FIG. 6 SEC 03-05井平面及剖面(1/50)

(2) 土壙 (Fig. 7~17・Pl. 4~6)

土壙は前記の様に調査区中央部に集中して遺存していた。擾乱による削平がかなりみられるが7基 (SK01~07) が確認されている。確認面は何れも黄褐色砂土であり、埋土は暗茶色砂土である。全体に残りはまちまちであるが埋土中からはSK05・07を除く土壙で共通する遺物が出土している。青磁器 (碗・皿・壺)、白磁器 (碗・皿)、褐釉陶器 (壺・鉢)、施釉陶器壺、青白磁碗類、黒釉陶器、鐵釉盤、土師器皿、瓦器塊、布目平瓦、奈良時代高台付坏 (須恵・土師)、古墳時代土師器壺・瓶などが細片乍ら出土している。亦SK05は土師皿6枚を副葬するもので土壙墓と考えて差しつかえないであろう。以下個別遺構について説明を加え、出土遺物について触れたい。

SK01土壙 (Fig. 7) 調査区南東隅に検出された隅丸方形の土壙で、長・短辺が70×60cm、深さ20cm程を残す。埋土中より鐵釉大盤2、褐釉長胴壺13、青磁碗25、白磁碗8、同皿1、青白磁碗3、施釉陶器5、黒釉陶器壺1、土師皿33、布目平瓦片5点などが出土地した。特に鐵釉大盤は底面に据えおかれた出土状況である。

出土遺物 (Fig. 8・裏表紙) 出土遺物のうち図示したもののうち1が見込みに刻花文をもつ青磁皿で外底部は露胎となる。同様に5も要折れの青磁皿で、見込みに刻花文と櫛刺突による雷光文を施す。外底部はくぼみ、露胎となる。2・4は淡オリーブ色の釉を厚く掛ける青磁碗である。内面は外方に開き、口縁部は若干肥厚する。外面は櫛描文、内面は刻花文および櫛刺突による雷光文を施す。3は口縁端部を外方に引出す青磁碗である。外面は荒い櫛描文、内面も櫛描文・弧線を施す。6・裏表紙掲載図は鐵釉大盤である。サイズはほぼ同一で口径40cm、器高10.6cm、底径16.4cmをはかる。口縁部は肥厚し、底部は上げ底となる。何れも筆致は中央部花芯から外方に及ぶ。7は褐釉瓶である。口縁部を失するが、小口瓶となるか。内外面ともに強い触媒ナデ調整で器面は連続して隆起する。

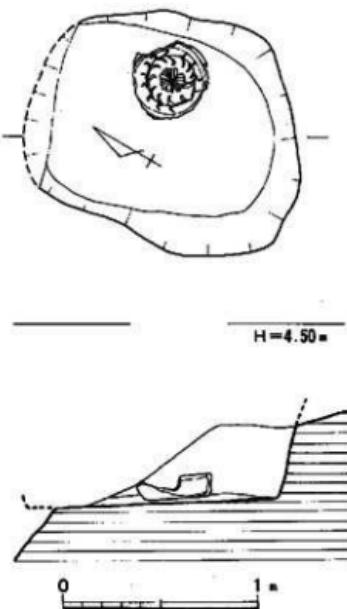


Fig. 7 SK01土壙実測図 (1/30)

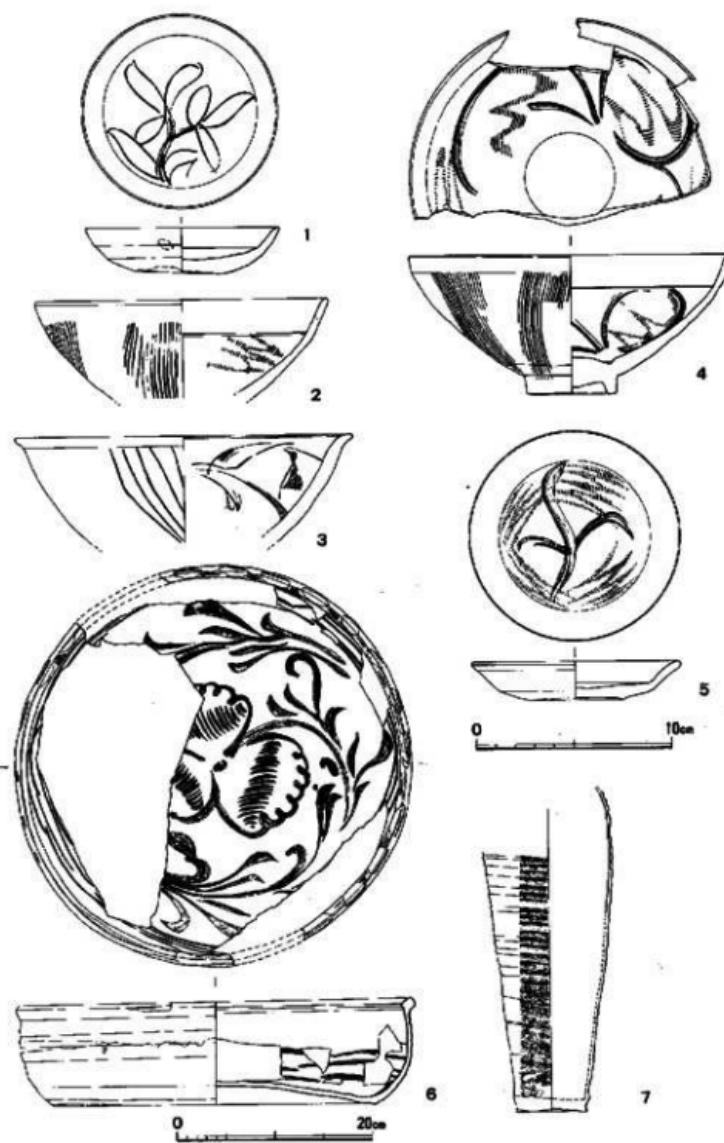


Fig. 8 S K01土壤出土遺物実測図 (1/3・1/6)

S K02土壤 (Fig. 9) 調査区南壁に近いS E02井戸址の東側に隣接する土壌である。南辺は調査区外となるが東西長3m、南北1.7m以上、深さ約50cmを残す長方形土壌で二段掘方となっている。埋上は暗褐色砂土で比較的多量の遺物が出土した。遺物は青磁碗20、青白磁碗・皿1、白磁碗2・皿1、施釉陶器壺4・鉢4・胴部破片16、褐釉陶器9・鐵釉盤1、布目平瓦破片34、土師皿33・同高台付皿3、瓦器碗1、須恵器壺16、瓦質土器2、土師器裏胴部破片32・同蓋2・高坏1点などである。

出土遺物 (Fig. 10) 出土遺物のうち1～3は土師皿である。土師皿は大小2種がある。1は糸切り離し後板目压痕とナデ調整が重複する。器色は灰褐色を呈し、全面横ナデ調整。口径8cm、器高1.3cm。2も小型皿である。底部は不整な調整である。糸切り後に板目压痕を残す。器色は淡灰色を呈し、全面横ナデ調整。口径8.4cm、器高1.1cm。3は大型皿である。底部は糸切り後板目压痕を残す。器色淡褐色を呈する。口径11.2cm、器高2.2cm。4は白磁皿である。器形は小振りで浅く、口縁端は緩く外方に引出される。釉色は灰褐色を呈し、体部内面および外面上半は施釉される。体部内面には細い一条沈線を施す。口径10cm。5は岡中では褐釉鉢形と理解したが実際は蓋形であると考えられるものである。淡茶褐色釉を全面に施す。身にあたる器種は不明である。口径13.2cm。磁灶窯系製品か。6は灰綠釉瓶であろう。口縁は外方に肥厚し、直立気味に外方に開く。口縁内周に目跡がのこる。口径6cm。7は褐釉壺底部であろう。内底部の一部を除いて施釉する。外面は全てヘラ削り調整。内面は棘輪ナデで凸凹が著しい。露胎部は赤褐色を呈する。底部外端に目跡がある。底径7cmを測る。

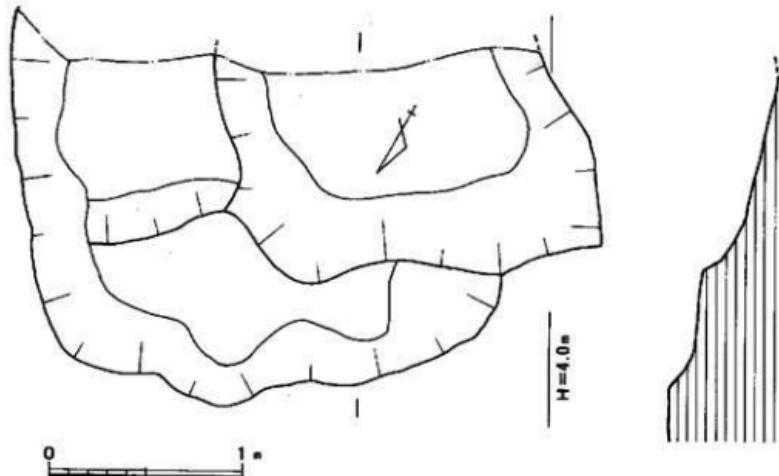


Fig. 9 S K02土壤実測図(1/30)

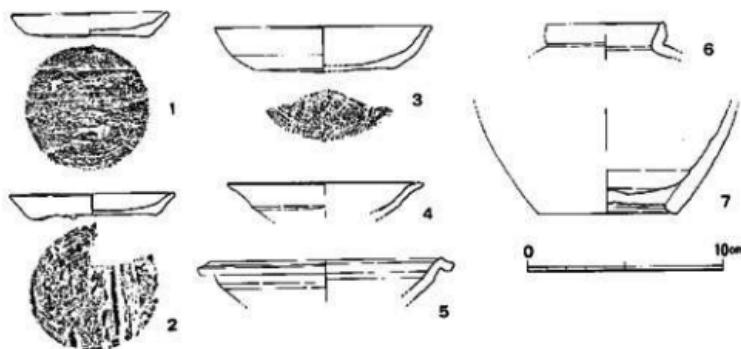


Fig. 10 S K02 土壤出土遺物実測図(1/3)

S K03土壤 (Fig. 11) 調査中央部に検出された長方形土壌で、長・短辺が $1.1 \times 0.75\text{m}$ 、深さ55cmを残す。埋土中より青磁器碗6、白磁碗2、褐釉陶器4、土師器皿46、布目瓦片4、須恵器2、土師器甕1、不明土器9点などが出土した。

出土遺物 (Fig. 14) 出土した遺物は青・白磁器、褐釉陶器、土師器皿、布目瓦、須恵器、土師器などが少量したが、これらのうち図に供し得るものは少なく同図1~3にあるものが全てである。1は平瓦である。外面は荒い縦方向の繩目叩きを施した後に横方向の強いナデを行ない、この後に幅1.4cm程の板状の工具で縦にナデ調整を施す。内面は経縫が $10 \times 8$ 本程の布目压痕があり、端部は斜め方向の強いナデを施す。また端部には不定方向の压痕がみられる。器色は黒灰色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。器厚1.3cm程度をはかる。2は須恵器高台环である。器面調整は内外面ともに横ナデであるが仕上げは粗雑である。器色は淡灰色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径12.2cm。3も須恵器高台环である。口縁および高台端

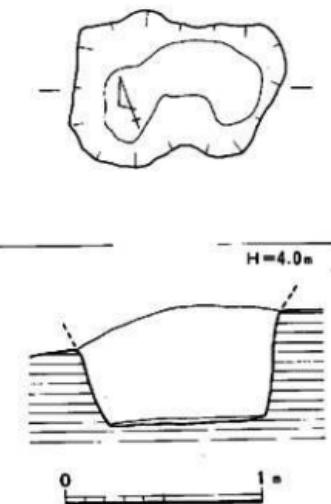


Fig. 11 S K03 土壌実測図(1/30)

部を欠失する。器色は外面暗灰色を呈する。器画調整は内外面ともに横ナデで内底部はこの後ナデ調整。高台部は坯体部下端より内側に入っている。胎土には細砂を多く混入するが緻密で、焼成は堅緻である。8C代の須恵器であろうか。SK03土壤では先述の様に出土遺物は細片であるが特に中世陶磁器類での組み合わせは他土壤と何ら変わることろがない。

SK04土壤 (Fig. 12) SK05上  
壤を切る不整土壤で長・短辺が2×  
1.3m、深さ45cmをはかる。埋土中よ  
り青磁器碗9・施釉陶器5・布目瓦  
2・須恵器坏5・同窓・鉢1・土師  
器皿15・瓦質土器碗3・染付碗1点  
などが出土した。

出土遺物 (Fig. 14) 出土遺物では4～6・9が須恵器、12が楕円蓋、13が土師皿である。4は高台环身である。直線的に外方に開く。黒灰色～淡黄色を呈し、内外面ともに横ナデ調整。5は内弯気味に外方に開く高台坏で、高台は低く底部端よりやや内側に位置する。内外面ともに横ナデ調整。器色は黒灰～淡黄色を呈する。6も同様に低い高台坏で底部はややあげ底となる。9は塗蓋である。非常に器高が低く、大井部は扁平となる。淡灰色を呈し、口径15.2cmをはかる。12は口縁端部が平坦で内縁はややあがる。内外面ともに横ナデ後に施釉する。口径13.6cmをはかる。13是比较的小形品である。底部は回転糸切り離しで、あげ底となる。口縁は低く、内外面は横ナデ、内底部はナデ調整である。口径8.5cm。器高1.8cmである。

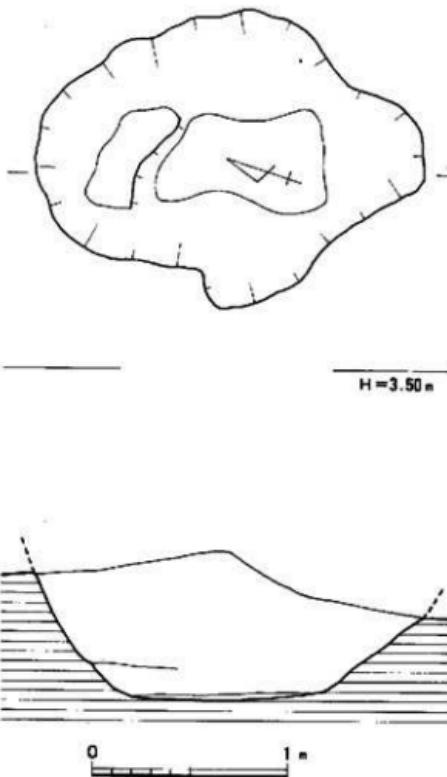


Fig. 12 SK04土壤出土状況図(1/30)

S K05土壤 (Fig. 13) 調査区中央に位置し、周辺土壌によって掘方西壁を失っている。掘方規模は長・短辺が $2.35 \times 1.35$ m、深さ50cmをのこす。また底面は長辺1.8m、短辺は北側がやや幅広く65cm程度であり、頭骨の位置周辺に全て底部糸切り離しによる土師皿があった。この他に埋土内からは土師器皿23、瓦質土器14、須恵器高台壺10・同蓋4、土師器甕23・同甕把手1・同カマド1点などが出土した。

出土遺物 (Fig. 14) 遺物のうち7・8、10・11は本土壌埋土中で出土した須恵器である。また14~16は土壌北隅にある副葬土師皿である (Fig. 13)。7・8は蓋で、口縁端部が若干立ち尖っている。天井部はヘラ削りで、7は中央部が少し窪む低いつまみをつける。口径は夫々11.4・13.8cmである。10・11は高台壺である。10は高台が底部外端にはば一致するが、11では底部外端よりやや内側

にはいり、端部は丸味をもって外方に開く。

14~19では立あがりの低い16を除きほぼ同一法量のものである。口径・器高・底径を列記すれば14~10.5・2.3・7.6cm、15~11.4・2.3・6cm、16~9.9・2.4・7.6cm、17~10.6・2.5・7.6cm、18~11.3・2.4・7.5cm、19~11.6・2.5・8.5cmとなる。またこれらの平均値では口径10.88cm、器高2.4cm、底径7.46cmとなる。外底部は何れも板目压痕を残し、端部周縁をナデまわしている。また一部には不定方向のナデもみられる。内・外面は横ナデである。焼成は堅緻で、淡褐色~赤褐色を呈する。

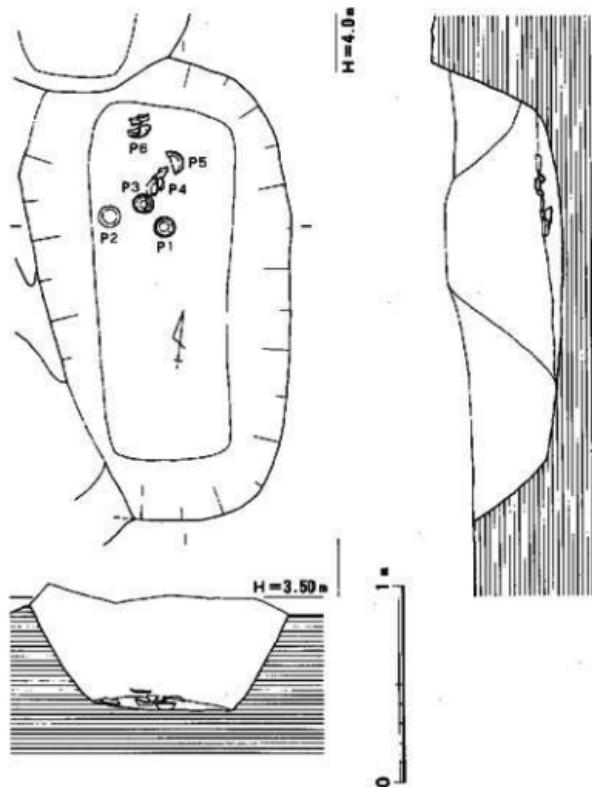


Fig. 13 S K05土壤実測図(1/30)

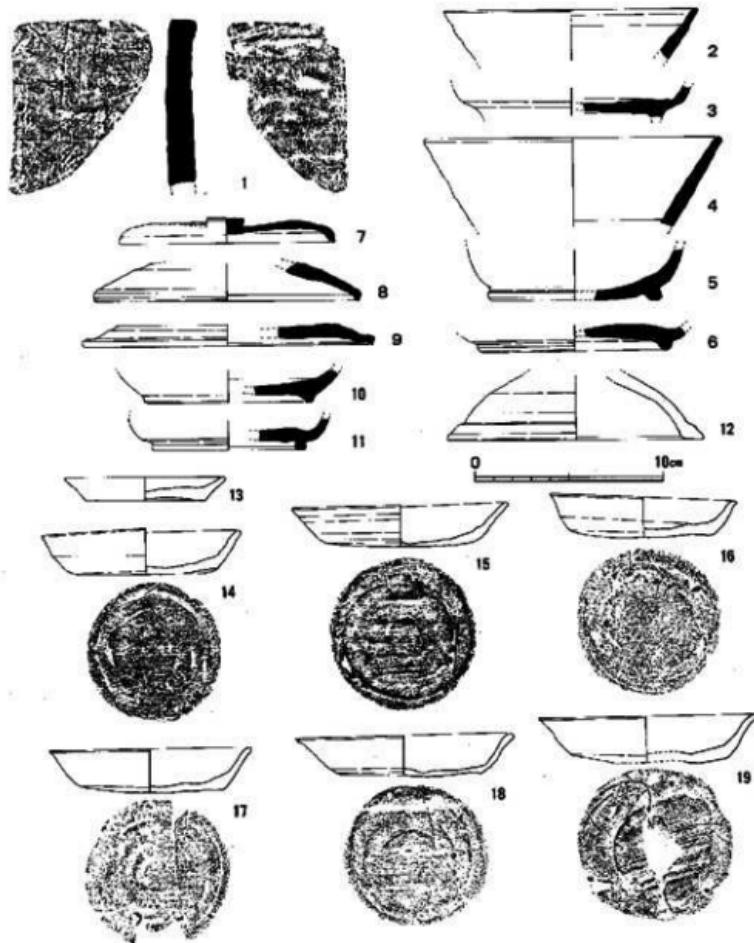


Fig. 14 S K03-04-05土壤出土遺物実測図 (1/3)

S K06土壤 (Fig. 15) S K05土壤の北側に隣接する不整円形土壤である。規模は径が1.2m、深さ80cm程度をこす。埋土は暗褐色砂土で炭粒を含む。埋土中より青磁器碗3・同皿1(珠光青磁)、白磁器碗2、施釉陶器2、土師器皿26、布目平瓦1、須恵器高台坏6、土師器甕14点などが出土した。

出土遺物 (Fig. 17) 出土遺物のうち1は石鍋口縁破片である。口縁部は内傾気味で、上端は平坦で端部が丸く磨滅している。外面は長方形の把手を削り出す。また器面外面は幅0.8~1cm程度の縱方向削りを連続的に加える。また内面は斜め方向の削り調整および研磨痕を残す。器壁は1cm程度の比較的薄手な製品である。2は青磁器皿である。見込みには櫛刺突による雷光文を施し、貫入が非常に著しい。釉は淡緑色を呈し、外底部は露胎となる。また外底部は若干あげ底となる。底径は復元9.6cmをはかる。3は高台端部と坏上部を欠く高台坏となり、須恵器である。坏部は丸味をおびる。また高台は坏外底部より若干内側に位置し、底部は肥厚する。外面は全体的に横ナデ、内面は横ナデ後に内底部をナデ調整を施す。器色は外面は黒灰色、内面淡黄灰色を呈する。胎土は密で、焼成は非常に堅緻である。復元底径10cmをはかる。図化し得なかった磁器類では櫛描き青磁あるいは土師皿では全て回転糸切り離し底である。

S K07土壤 (Fig. 16) 調査区中央部で検出された円形土壤である。検出面埋土中に柱穴が検出できることからこれらより古い所産である。柱穴群は埋土中に青・白磁器を出土するものが多い。上層埋土からは須恵器坏1、同蓋1、土師器腹22、不明土器11点が出土したが磁器類は一切含まれていない。

出土遺物 (Fig. 17) 出土遺物のうち4は須恵器坏蓋破片である。蓋端部は丸味を有する。内面反りは低く、鋭い。器色は外面淡灰色を呈し、内面は赤褐色となる。胎土は密で石英細砂を混入する。焼成はやや軟質である。5も須恵器蓋脚部破片である。外面は荒い格子目叩き調整、内面は青海波文をのこす。器色は外面黒色、内面赤褐色を呈する。胎土はやや粗で、石英砂を混入する。焼成は非常に堅緻である。6は土師器蓋脚部破片である。外面は比較的こまかい横・縱方向の刷毛目調整を行なう。また内面は斜め方向のヘラ削り調整である。器色は外面には煤が付着するが、内面は赤褐色である。胎土は砂粒を多く含み、やや粗である。焼成は堅緻である。

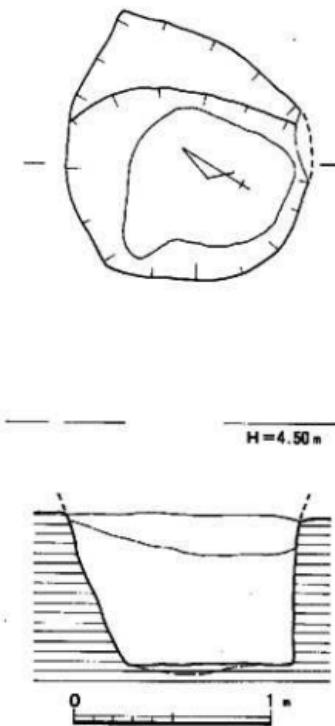


Fig. 15 S K07土壤実測図(1/30)

出土遺物は何れも極めて小型の細片類である。時期的に区別できるのは図示したものが殆どである。土師器類は6の様に古墳時代中期（5C代）の特徴をもつものが多いと考えられる。また須恵器は4の様に高台部の位置が環外底部端よりやや内側に這入る形態をもつところから8C後半代かと考えられる。また伴出遺物に磁器類が見当らない点で前の時期以降に比定できる可能性が高い。

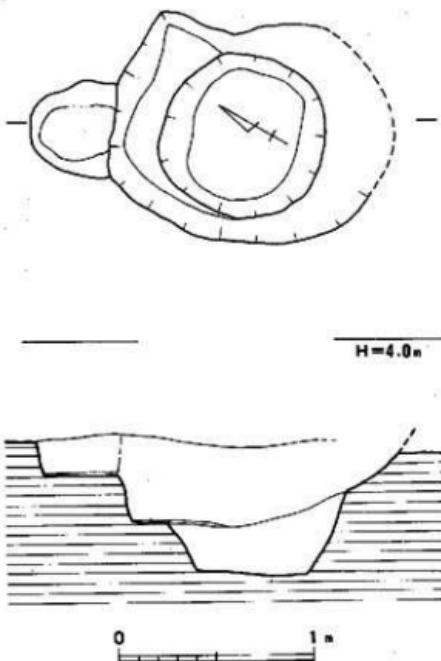


Fig. 16 S K07土壤実測図(1/30)

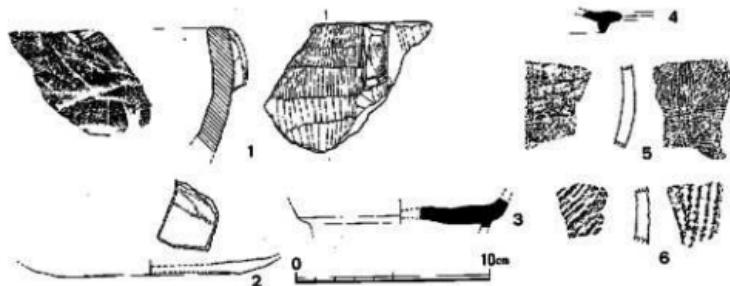


Fig. 17 S K06・07土壤出土遺物実測図(1/3, 1~3:S K06, 4~6:S K07)

### (3) 溝

S D01溝 調査区西端部にかろうじて検出された南北溝である。規模は擾乱による改変が著しいが上端幅100~80cm、底面幅40~60cmをはかり、断面逆台形となる。本来はかなり整然とした方向の溝であるらしい。溝方向はN-13°-Wと若干磁北より西にふれている。埋土は暗褐~黒褐色砂土で炭粒を含む。埋土中より青磁器24・同壹1・同且6・同合子1・同不明、白磁器碗25・同且3、褐釉陶器17、鉄釉盤1、施釉陶器79、布目瓦29、土師皿10、瓦質土器塊5、土師器裏2点が出上した。この溝の性格は調査延長が短く良く判らないが何れにせよ博多町割に關係するものと考えて差しつかえないであろう。

出土遺物 (Fig. 19) 出土遺物のうち1は見込みに刻花文と模刻突文を配する青磁皿である。底部は緩い上げ底となり、外側は露胎となる。体部は中位で屈曲し、口縁端も緩く外方に引出される。口径10cm。器高2cm。2は玉縁口縁をもつ白磁碗である。釉の掛かりは薄く、淡緑色を呈する。3は青磁碗である。体部内外面に模描文を施し、内面口縁下に一条沈線をめぐらす。釉は淡オリーブ色である。口径15.4cm。4は白磁碗である。釉は淡緑色で、高台および体部外面は露胎となる。5は見込みおよび体部内面に刻花文を施す青磁碗である。内面見込み周縁は茶溜りとなって沈線状に釉がめぐる。高台外端および底部外面は露胎となる。高台部径6.4cm。6・7は施釉陶器である。6は灰緑釉瓶であろう。体部はヘラ削り痕が観察できる。口縁は肥厚し、内縁周には白色砂をおいた目跡がみえる。口径6.4cm。7は褐釉小口瓶であろう。口縁は断面四角形をなし、口縁内面および体部の一部以外は殆ど露胎である。口径3.8cm。8は土師皿である。器色は淡灰褐色を呈し、内外面ともに黒斑多し。底部は回転糸切り、他は横ナデ後に内底部のみはナデ調整。底径7.2cm。9は平瓦破片である。外側は荒い繩目叩き、内面は経縫が1cm平方あたり10×9本程度の布目压痕を残す。器色は淡灰褐色~赤褐色を呈する。

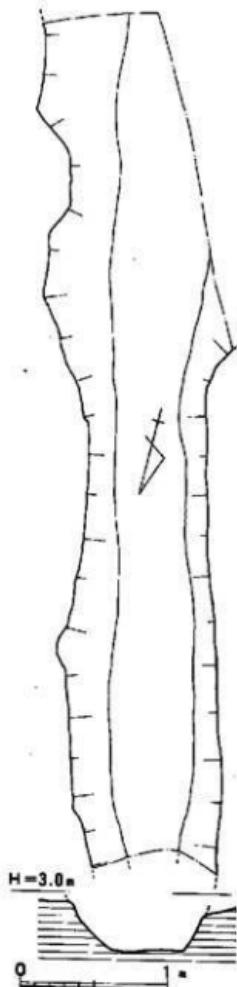


Fig. 18 SD01溝実測図(1/50)

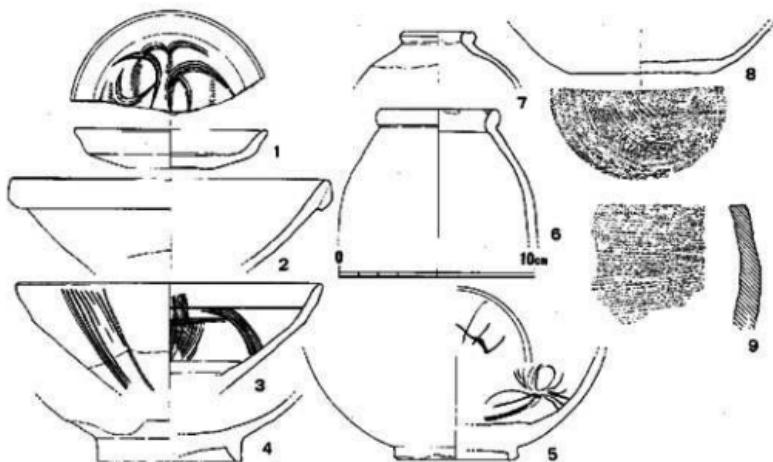


Fig. 19 S 001 溝出土遺物実測図(1/3)

#### (4) 柱穴群および擾乱坑

土壇および井戸址の残る調査区中央部では18個の柱穴と考えられる小ビットが検出されたが何れも建物としてまとまりをもたない。これらの柱穴群の埋土中からは何れも青磁器、土師皿などの遺物が出土し、時期的に特に区別できる柱穴はない。また東・西側の擾乱坑より若干の遺物が出土した。

出土遺物 (Fig. 20) 出土遺物は柱穴のもので固化的可能なものはなく、遺構確認面・擾乱坑のものが殆どである。1~4は土師皿である。大・小が区別でき、何れも回転糸切り底である。5は土師器高台付皿で、淡黄褐色を呈する。内外面ともに横ナナ子調整。6・7は見込みに刻花文および構刺突による雷光文を描く青磁皿である。何れも包含層出土。8は青磁水注であろう。口縁は内面が跳ね上げ状となる。全体的に器壁のつくりは薄く、精美な感じをうける。釉色は淡緑色である。把手は上面に2条沈線を施す扁平なもので、幅約2cm、厚さ6~7mmを測る。口縁内上端に目跡が残る。口径9.4cm、胴部径16cm。9は青白磁の文様構成をもった白磁碗である。全体に非常に薄手で繊細な感じをうける。高台内面~外底部は露胎となり、施胎部は全体に貫入が著しい。見込みはヘラ描きで円文を組み合せた波状文と構描文を施し、体部内面に波状文を配置するが外面には文様はない。口径17.4cm、高台径4.4cm、10も白磁碗である。見込み外縁は輪状に露胎となる。また高台の外周に目跡がのこる。11は内外面ともに黒茶褐色釉を施す小鉢である。口縁は端部をおり返して丸くしあげる。体部外面はヘラ削り痕が顕著に残る。体部下端の露体部の観察から削り調整時の機械は時計まわりである。12は青磁碗か。釉色は黄色味をおびた淡オリーブ色である。体部には貫入が多い。

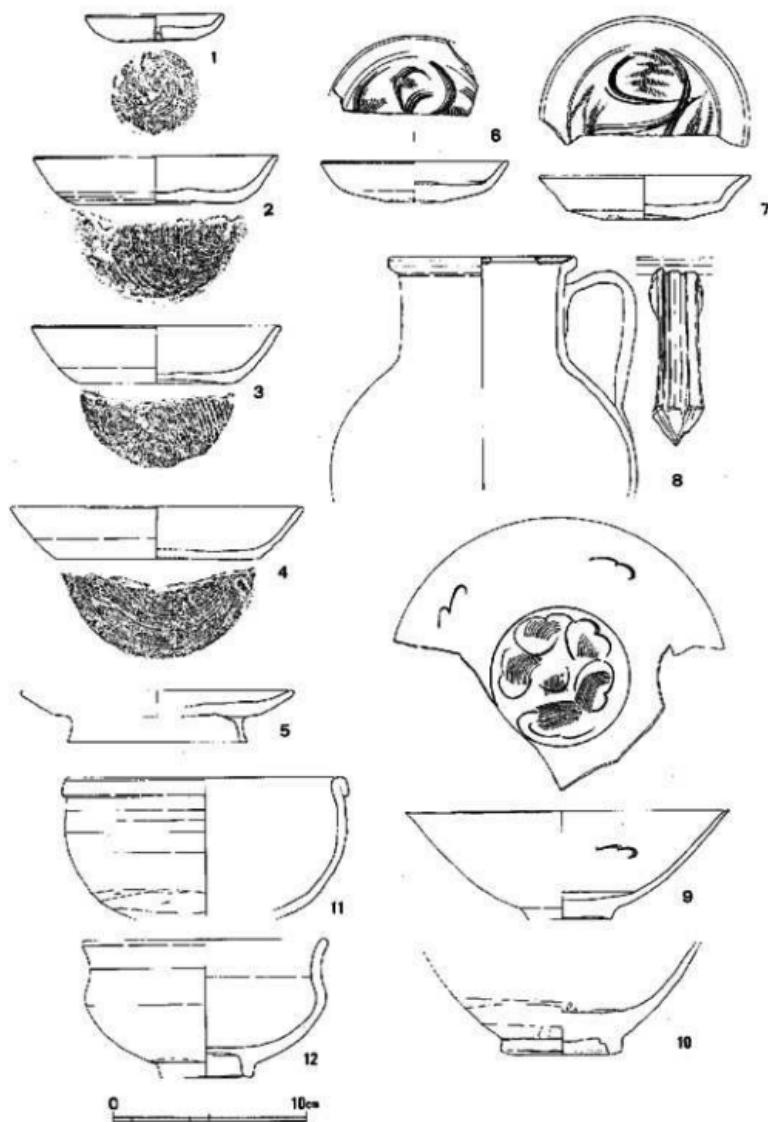


Fig. 20 柱穴群および擾乱坑出土遺物実測図 (1/3)

## IV まとめ

これまで第25次調査で検出した各時代の遺構・遺物について個別に説明を加えてきたが、収録し得た遺物類は紙面の都合上限られたものとなっている。ここでは検出した遺構・遺物に若干の検討を加えまとめとしたい。

### 遺構出土の陶磁器について

井戸址および土壤群、また擾乱坑などより出土した輸入陶磁器類は多数あるが、ここで<sup>(2)</sup>は各遺構の構成を森本朝子氏分類によってみることとする。

### S E 01 井戸址

同安窯系青磁碗ⅠおよびⅡ類、陶器C群捏  
鉢Ⅰ類、この他に陶器B群に属すると思われ  
る褐釉水注・四耳壺・甕などがみられる。

### S K 01 土壤

同安窯系青磁碗ⅠおよびⅡ類、同平底皿Ⅰ  
類、白磁平底皿Ⅳ類、陶器A群Ⅲ類褐釉小口  
瓶Ⅱおよび陶器A群Ⅰ類黄釉陶器大盤（玉縁  
を有する福建省磁灶窯系のもの）

### S K 02 土壤

陶器B群褐釉長瓶、同B群褐釉器蓋（福建  
省磁灶窯系）

### S K 04 土壤

陶器B群器蓋（福建省磁灶窯系）

### S D 01 潟

同安窯系青磁碗Ⅱ類、同青磁平底皿Ⅰ類、  
白磁碗Ⅳ・V類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、陶器  
A群褐釉小口瓶Ⅰ、同B群褐釉長瓶

### 擾乱坑および包含層

遺構より遊離した資料で白磁碗・皿、青磁  
(龍泉・同安窯系を主とする) 瓢・皿、各種  
陶器（綠釉盤、褐釉甕類）が遺構出土量の  
1倍出土した。

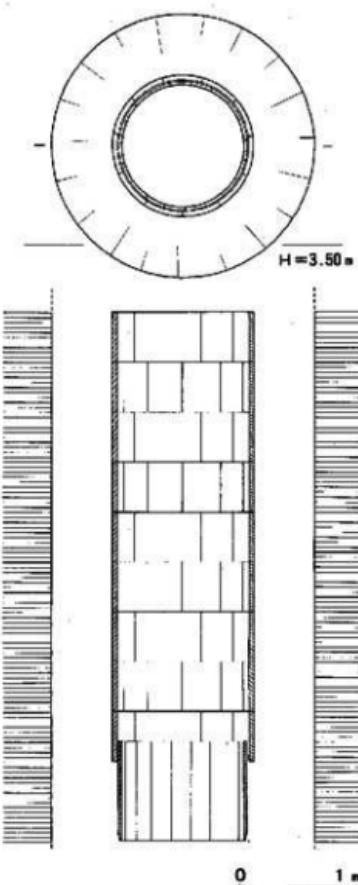


Fig. 21 S E 04 井戸址実測図

以上は陶磁器を出土した遺構の主要な陶磁器の構成であるが、前記の様に各遺構は各々輸入陶器・陶器の破片を含んではいるが明らかに分類できるものは少なく、更に量的構成を知ることは困難であった。この輸入陶磁器の器種・量的構成を検討する作業は保存状態の良好な遺構を将来的にも抽出し、確実な資料のつみ重ねを継続的に行う必要がある。最後に、博多遺跡群の調査は地下鉄工事に伴う祇園町調査区（昭和52年2月）で知られた多くの知見をもとにして、戦後復興期に林立した木造家屋の建て替え時の調査に及び、現在調査数25次に至っているが、これら老朽家屋の鉄筋高層化はまた確実に弥生時代以来2000年に亘る膨大な遺跡を消滅に追いやることが明らかとなっている。発掘によって得られた多くの成果が現在の再生産活動とどのような連関をもって把え得るのかは眼前の課題といえる。

---

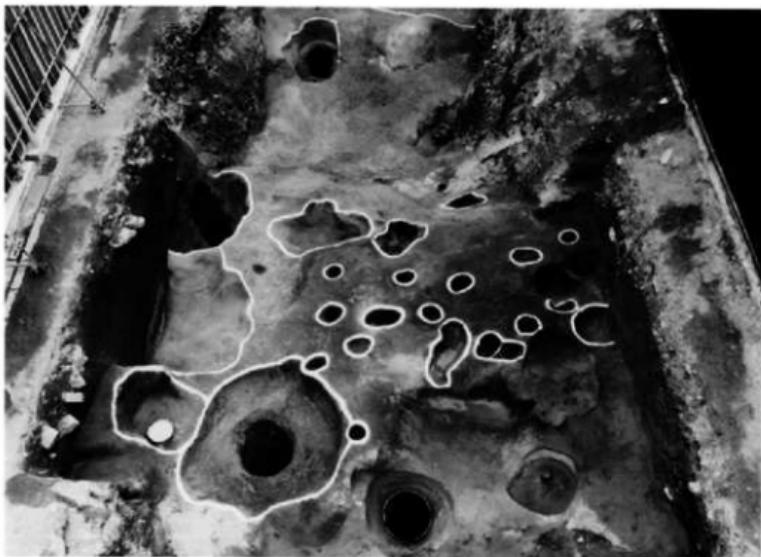
(註) 森本朝子『博多出土貿易陶磁分類表』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊」

福岡市教育委員会 1984

# 図 版



1. 第25次調査区全景（東側より）



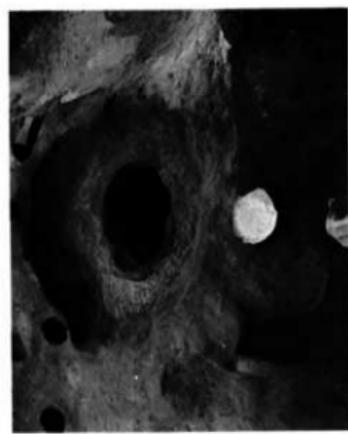
1. 第25次調査区全景（東側より）



2. 第25次調査区中央部遺構出土状況（北側より）



1. SE01井戸址・SK01土塗出土状況（内側より）



3. SE03井戸址出土状況（内側より）



2. SE02井戸址出土状況（内側より）

4. SE04井戸址出土状況





1. SK01土壌出土状況（北側より）

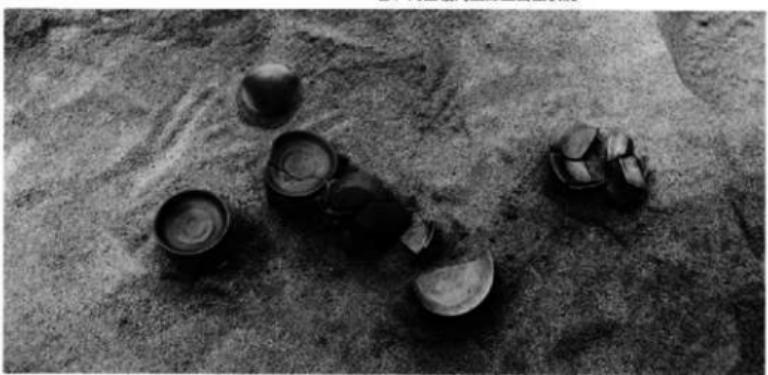
2. 同土壌内鉄軸大盤出土状況

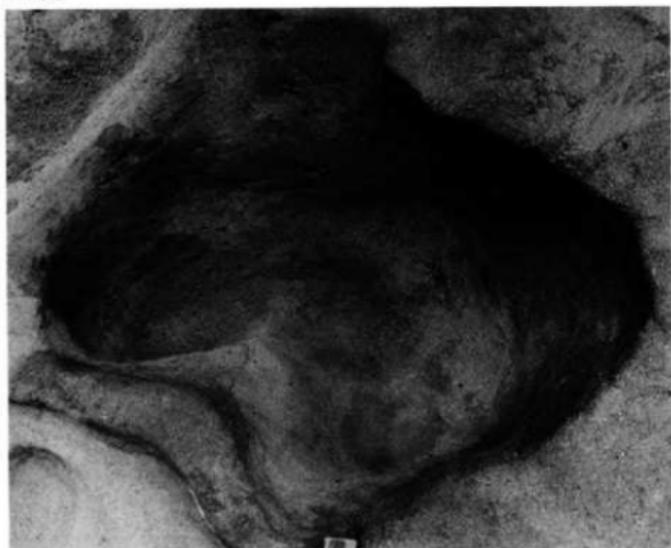




1. SK05土壤出土状況（南側より）

2. 同土壤内土師皿出土状況





1



2

1. SK03土壤出土状況（南側より）

2. SD01溝出土状況（南側より）

---

## 博多 V

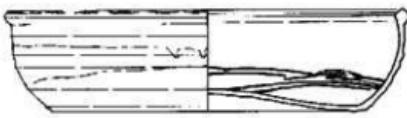
福岡市埋蔵文化財調査報告書第120集

1985(昭和60)年3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目7番23号

印刷 株式会社 チューエツ  
福岡市博多区東北志2丁目9番1号

---



SK01土壤出土鉄軸大盤 (1/3)